



私の家が、昔は造り酒屋で、さらに昔には廻船問屋を営んでいたということ、話に聞いていました。今はなくなっ
てしまいましたが家の奥の敷地に人が
入れるような大きな壊れた樽があっ
たり、「サス中」の屋号が入った徳利が
残っていたり、廻船の舵輪があったり
したので、そうだったんだなと思っ
ていました。しかし、それは私にとっ
ては昔話、というよりはおとぎ話のよ
うな感じだったように思います。

先日、みんなと倶楽部の活動で、旧掛
塚郵便局を見させていただいた時に、そ
の奥にある蔵に「サス中」の屋号があ
った瓦があることにびっくりしました。
御先祖は本当に大きな商売をしていた
んだなと。掛塚の歴史に詳しい名倉先

生には、「知らなかったの？」と驚かれ
てしまいました。

私の祖父、父の両親は、父が十代の
半ばだった頃に亡くなっています。そ
のため、私は父方の祖父には会った
ことがありません。本来ならば父や孫
である私たちの代に引き継がれるはず
だった記憶のバトンが渡されないうま
途切れてしまっているように感じます。

子供の頃、もう五十年近くの昔になり
ますが、貴船神社の交差点から南へ、
旧掛塚郵便局あたりまで、いろいろな
店がありました。八百屋さん。魚屋さん。
銭湯に洋品店。果物屋さん。雑貨屋さ
んや金物屋さん。床屋さんに美容院。
自転車屋さん。肉屋さん。電気屋さん。
食堂やラーメン屋。酒屋さん。駄菓子
屋さん。百五十メートルほどの商店街
ですが、日常生活に必要なものはい
がい全て揃いました。酒屋さんに空き
瓶を持って醤油を買に行った。今の
子供たちには分かってもらえないかも
しれません、そんなことを思い出し
ました。



郵便局裏の蔵

あったお店が閉じてしまっています。
子供の頃、掛塚のこの通りはこんな町
だったんだよということを伝えておき
たい。そう思うのですが、今度は伝え
るべき私の子どもがここに住んでいま
せん。記憶のバトンを渡したくても渡
す相手がいなくなっているのです。

記憶のバトンは、渡す人がいて、それ
を受け取る人がいて、その両方が揃わ
ないと受け継がれていきません。

今年もまた、祭りの季節がやってきま
す。こうした機会に、みんなと倶楽部
の活動が、港を中心に栄えていた頃の
掛塚や、昭和三十年、四十年の頃の掛
塚の町の記憶をできるだけたくさん
の人に受け渡す役に立てたいなあと
思います。

記憶のバトンの受け渡し — 松下和弘 —

みんなと倶楽部
My hometown Kaketsuka
MINATO CLUB
掛塚
ESTD.2016

第6号

P1 記憶のバトンの受け渡し 松下和弘
P2 旧津倉邸探訪其の六 旧津倉邸一般公開のお知らせ
P3 「のぎりと掛塚」の話 くりものや復活?
P4 ちよといけ? 松山忠世さん(大当町) すっごいね!

ちよといけ?

温故知新! 掛塚を知る「にーさ・ねーさ」の方々に、掛塚生まれの主婦二人組(のりこ&さゆり)がインタビュー。今回は、大当町の松山忠世さんにお話を聞いてきました。

松山忠世さん 73歳(大当町)



Q どんな子供さんでした?

六年生ぐらいまで背が小さくてさ、朝礼なんか必ず「右にならえ」で「前へならえ」なんかやった事がない(笑)。でも車駄天とか・・・すばしっこくて足も速かったもんで百メートル競争の代表になった事もあっただよ。

僕らは一年中天竜川の河川敷で遊んだね。中町辺りまで歩いてから中州に泳ぎだすと流れに乗ってちょうど大当町のあたりに着くだよ。昔は六尺禪(ふんどし)で、小さい子はおぼれても分かるように赤やエンジでさ、遊び終わるとダシ(アトラボット)に上って禪をバタバタと乾かしてね(笑)。中州では釣りをしたり、鳥の卵を獲ってそれを禪に挟んで持ち帰ったり、『ばっさん』という手長海老も獲って食べたな。

冬になりや堤防の下に陣地を作って遊んで、春になるとメジロ獲りね。メスを入れたカゴに「とり餅」をくつつけた桑の枝を差して松の木に仕掛けとくだよ。メスの鳴き声に誘われて飛んできたオスがベトベトの餅にくっついて重みでクルッとひっくり返って・・・。それを捕まえて(益鳥のため現在は捕獲禁止)足や羽にくっついた「とり餅」を丁寧にとって飼うんだ。葉っぱを摺って餌にすると羽の艶が良くなるんだ。

他にもすみれ遊園地の所にあった蓮池でザリガニをとったり、おぼこ(ボラの子)釣り、蛭やいさたも獲ったね。そうやって自然の中でいろいろ覚えてきたもんで勉強なんかした覚えは全くないだよ(笑)。

Q 狩り(笑)以外ではどんな遊びを?

本町の同級生の所に遊びに行ってソフトボールとかやったね。すると二つ三つ下の連中も顔見知りになってね、縦社会の時代でさ、ちよっと悪いことすりゃすぐに「はぶせ」(仲間はずれ)。その代わり二日三日経てばまた仲間に入れてさ。



自然の中で元気に飛び回る当時の子供たちを思い浮かべながら楽しくお聞きしました。無理を言っただけで披露していただいた趣味の詩吟は、その声の迫力、凛とした強さに圧倒されました。これは是非皆さんにも聞いていただきたいですね!

Q お祭りの思い出や当時の様子は?

お祭りの日は小学校五年生ぐらいから吹き始めて屋台の後ろで吹いてたよ。子供がたくさんいたもんで小太鼓を叩くグループを作って順番を決めてさ、小太鼓を叩いた人は屋台の前に座れる。お囃子をやらなきゃ前は乗せない、横! って。

今みたいに出店はないもんでサトウキビをかじってたね。鈴木自動車(スズキ)に入社して広島にいた時はお祭りの時期になると笛の音が頭から離れやせんでさ(笑)。まだ21歳の頃で祭やりたい盛りだったけど4年ぐらい我慢したんだよ。

小学校の頃は中当町に「おはりや」という駄菓子屋があったよ。くじ付きのお菓子が多くて一個五〇銭のキャラメルは「ススメ」が出るともう一個もらえるとかね(笑)。一日のおこづかいはいはだいたい五円だったね。

すっごいね!

松山さんから、掛塚出身の「すっごい人」を教えてくださいました。

私がスズキに入社したのは昭和38年ですが、当時はまだ四輪車よりも二輪車の生産が主体でした。

各社共二輪車の性能・技術を競い合い世界各地でロードレースが開催されていました。入社したこの年、スズキはイギリス領マン島で開催された世界ロードレース50ccの部門で初優勝をし、盛大に祝賀会が行なわれました。

この時の優勝ライダー(兼エンジン)が何と掛塚蟹町出身の伊藤光夫さんです。

掛塚にもすっごい人がいるんだな。と感激したのを覚えています。



写真提供: スズキ(株)

※マン島TTレースは、100年以上の歴史を持つ世界で最も過酷な公道レース。伊藤さん(浜松市在住)は、そこで優勝した唯一の日本人です。



伊豆石の蔵と灯籠

旧津倉家住宅の庭、北西の隅には、掛塚の町でよく見かける伊豆石の蔵があります。明治時代に製作された銅版画には2棟の蔵が描かれていますが、現在も残るのは赤い丸で囲った1棟だけです。

日本で石蔵が多く造られたのは江戸時代後半から昭和時代初期まで。一見、四角い石を積み上げた「積石(つみいし)」工法によるものと思われがちですが、大正初期頃までの石蔵は伝統的な木造の軸組みに石の壁を張った「張石(はりいし)」で造られています。

石蔵に求められたのは防火。木造家屋が密集していた掛塚では火災が多く発生したため、津倉家では土蔵よりもさらに防火性の高い石造の蔵が建設されました。

石蔵に使われている伊豆石が掛塚に多く見られるのは、江戸に木材を運んだ帰り船のバランスを保つためのバラストとして伊豆の下田付近で積み込まれたため。掛塚が湊町で栄えた歴史を今に伝えるものの1つが、掛塚湊で陸揚げされた伊豆石です。

掛塚だけにとどまらず、遠州地方の各地に見られる伊豆石の利用例は石蔵や石塀ですが、津倉家では石灯籠まで伊豆石で造られています。庭に据えられた3基の春日燈籠は、それぞれデザインが違っていますが、すべて伊豆石製と思われまます。この灯籠についての記述と思われる内容が、明治19〜20年に津倉勤六の日記として書かれた『必携』と題した文書に残されています。

明治廿年一月一日 石灯籠式組今朝竹吉丸へ積入。
二月三日 石灯籠庭え式本、庭竹建備へ。

竹吉丸が出帆したのは「鍋田浦」と書かれていますので、伊豆の下田港。『必携』の中では灯籠は2本ですが、残る1本は後日据えられたものと思われまます。この灯籠は風化

講習会を開催

8月19日(土)、竜洋学供会館で天龍製鋸(株)江原一也さん(田町出身、現在は平間在住)を講師に招きのこぎり掛塚の勉強会が開かれました。

掛塚は、天竜の山々から切り出される木材を船で江戸などに運ぶ湊町として栄えましたが、天竜川を筏で運ばれてきた丸太を板や角材に加工する木挽き職人が大勢いたそうす。また、木挽きが使う鋸(のこぎり)を作る鍛冶屋さんもたくさんあったそうす。

その鋸は「前挽き大鋸(まえびきおが)」といわれるもので、葛飾北斎の富嶽三十六景「遠江山中」には、大鋸(おが)を使う職人や鋸の刃の目立てをする職人の姿が描かれていて、どんなふうに丸太から板を切り出していたのかがよくわかります。大きな丸太を切るの胴体の幅がとて広くて、おが屑を掃き出しやすいように刃の山(ギザギザ)が大きくなっているのが特徴なのだそうす。

鉄を叩いて、こんなに大きく伸ばすのはとっても難しかったと思います。掛塚で作られた大鋸は「掛塚鋸」と呼ばれ、天竜の山間部や遠く山梨でも使われた当時のブランド品だったそうです。自分のことのように自慢したくなりますね(笑)。

江原さんは郷土資料館に展示されている大鋸の硬さを測って、どんな材料が使われていたのか調べてみたいそうす。私は、ひいおじいさんが木挽きだったので、この大鋸で実際に木を切ってみたいと思いました。

そんな掛塚鋸ですが、明治の初めになると機械による製材所が各地に作られ(掛塚でも「大東屋」が明治7年に蒸気で動く丸鋸機を使った製材を開始)、木挽きの仕事も、鋸鍛冶の仕事も減っていったそうす。鋸以外の製品を作って昭和まで続いた鍛冶屋さんもあったようすすが、廃業してしまつたところもあつたのでしようね。

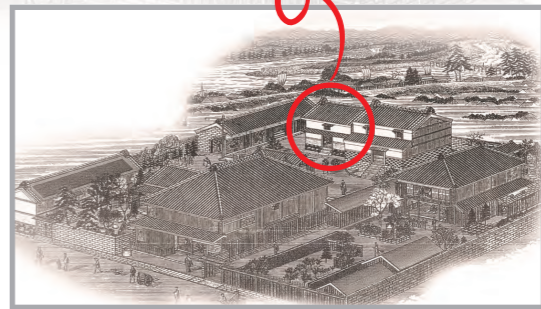
他にも江原さんのお話で印象に残つたのは、新しく開発した鋸刃をレスキュー用として各地の消防署に売り込んだところ

旧津倉邸探訪◆◆◆其の六

が目立ちますが、それも伊豆半島南部で産出された「伊豆軟石」の凝灰岩が使われている証拠。旧津倉家の石灯籠は、廻船問屋だった津倉家が持ち船に積み、はるばる下田から運んで来た掛塚湊の歴史遺産なのです。



どうして灯籠の上に!? 不思議...でも庭にマッチした素敵な灯籠アート ↓



記事 斉藤朋之



伊豆石で作られた石灯籠



今回は、天龍製鋸株式会社にお勤めで、田町出身の江原一也さんに、「のこぎり掛塚」の話をさせていただきました。

「あのカッター(鋸刃)のおかげで、人の命を救うことができました」と地方の消防署からお礼の電話がかかつてきたという話でした。ものづくりのやりがいを感じる瞬間だつたらうなと感じました。

改めて、木材の町、職人の町としての掛塚を感じられた一日でした。江原さん、ありがとうございました。

記事 須田明広



「掛塚鋸」と呼ばれた大鋸



みんな熱心に聴き入っていました。



富嶽三十六景「遠江山中」

大きな木にのって鋸を挽いている職人が目立ちますが、下から切っている職人や、左の方で目立てをしている職人の姿も見えます。

旧津倉邸を一般公開します

今年も掛塚祭りの両日とも、旧津倉邸の一般公開をします。旧津倉邸の資料や昔の掛塚の写真等の展示・ボランティアによる津倉邸の説明を計画中です。是非、皆さんお誘い合わせの上、お越しください。

●日時
10月21日(土)・22日(日)
午前9時〜午後4時まで
(入場は午後3時半まで)



「くりものや」が復活か!?

砂町の「くりものや」がこの秋に復活? 明治から昭和四〇年頃まで掛塚で愛された「くりものや」。今、創業者忠作さんのお孫さん二人が復活に向けて動き出しました。砂町の須田修司さん、川袋の明広さんです。明広さんにお話をうかがいました。どうして今「くりものや」を?

父の実家の家業がどんなものだったのかよく知りませんが、木工が大好きで、最近、木工旋盤をやってみたくなりました。考えてみたらそれが「くりものや」の家業だったので(笑)。そうしたら「くりものや」の屋号をこのまま消したくないという気持ちが強くなって、従兄弟、先日亡くなった二代目の長男と力を合わせて復活させようということになりました。

「くりものや」の三代目は道具も技術も受け継いでいない素人ですが、現代の生活に合った、木の温もりが感じられるものを作りたいですね。皆さんに親しんでいただけたらいいですね。予定です。



コマ復活か!?